

複合動詞後項における意味的抽象化

王 秀 英

キーワード: 後項、意味的抽象化、文法化、段階、感情的

要旨

本稿は、複合動詞後項「～だす」「～かける」「～つける」「～こむ」「～あげる/あがる」「～ぬく」を対象とし、それぞれの意味の抽象化を各段階の違いとして捉え、各段階の方向性のあり方について考察したものである。考察の結果、①複合動詞後項の意味的抽象化は「方向」「アスペクト」「副詞的修飾」「感情的意味」の四段階に分けられること、②日本語複合動詞後項における意味的抽象化の方向性は「方向→アスペクト→副詞的修飾→感情的意味」という傾向が見られること、を明らかにした。

1. はじめに

複合動詞には、「～あげる」「～こむ」「～つける」「～きる」などのような生産性の高いものが多く見られる。しかし、同じ形式の後項動詞でも異なる前項動詞と結びつくことによって、その後項動詞の意味も変わることが窺える。以下の例を見よう(以下の例文は『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)からのものである)。

- (1) 一歩踏み出すごとに板の割れ目から得体の知れぬ海虫が走り出て、水中に飛びこんでいく。(東郷隆『御町見役うずら伝右衛門』)
- (2) 翌朝はテレビの前に座りこんでニュースを見る。(向谷匡史『ヤクザという生き方』)
- (3) どうしてわたしが私立女子高の出身だと決めこんでいるの？(ノーラ・ロバーツ(著)竹生淑子(訳)『恋人たちの航路』)

以上の例では、同じ後項動詞「～こむ」が「飛ぶ」「座る」「決める」と結びつき形成した複合動詞において、その意味が違っていることが分かる。(1)の「飛びこむ」は「飛んで、水の中に入る」という「内部移動」の意味であり、(2)の「座りこむ」は「ずっと座る、長い間座る」という前項動詞の意味を修飾する「副詞的」意味を表し、(3)の「決めこむ」は、「勝手に決めて、それ以外考えない」という「動作のマイナス評価の強め」的な意味を表すと言える。

そういった複合動詞の後項をどのように捉えたらよいであろうか。影山(2013)は、従来の複合動詞の二分類、すなわち「語彙的複合動詞」と「統語的複合動詞」の前者を新たに「主題関係複合動詞」と「アスペクト複合動詞」に下位分類している。上の例で言えば、(1)の「飛びこむ」は主題関係複合動詞で、(2)と(3)における「座りこむ」と「決めこむ」はアスペクト複合動詞に属すると思われる。このアスペクト複合動詞の後項について、影山(2013:19)は、「これらの補助的な動詞は元来は一人前の自立語であったものと想定されるが、アスペクト複合動詞に組み込まれると、項構造や格支配の力を失い、L-aspectという機能的な役割になる。この現象は、認知言語学の研究で文法化(grammaticalization)と呼ばれる変化過程の一つと捉えられる。」と指摘している(「L-aspect」は「Lexical-aspect」のことを指す)。

また、それらの複合動詞後項について、先行研究では、「補助動詞的要素」(武部良明1953)、「具象性の薄い、形式化した意味を表すもの」(坂倉1966)、「意味上の発展」(森田1978)、「複合動詞後項の接辞化」(斎藤1992)、「文法化」(田辺1996、三宅2005)、「助動詞化」(西山・小川2013)といった名称で扱われている。

本稿では、これらのものを統一的に「複合動詞後項の意味的抽象化」と呼ぶことにし、抽象化の各段階の意味的特徴について考察する。

2. 先行研究

2-1. 複合動詞一般

本稿に関わる複合動詞のまとまった先行研究としては、影山(1993)、松本(1998)、由本(2005、2013)、姫野(1999)、影山編(2013)、などが挙げられる。複合動詞は影山(1993)以来、語彙的複合動詞と統語的複合動詞に二分されるが、特に前者の下位分類や分類間の関係等については、語彙概念構造(LCS)や特質構造(Qualia Structure)といった概念装置を用いて様々に分析されている(由本2005など)。松本(1998)は、語彙的複合動詞において、動詞の組み合わせにどのような制約があるかを考察している。また、語彙的複合動詞と統語的複合動詞との連続性についても、陳(2013)などで考察されているが、意味的には十分に捉えきれていないところがある。一方、姫野(1999)は多義的後項動詞の意味・用法を分析し、類義語との意味的差異を詳細に記述している。

2-2. 複合動詞後項における意味的抽象化と文法化

複合動詞後項について、先行研究では、意味的抽象化の様相の観点から捉えるものとして武部(1953)と森田(1978)が挙げられる。意味的抽象化を文法化の観点から捉えるものは三宅(2005)があり、意味的抽象化を文法化の観点から段階に分けるものは田辺(1996)がある。

武部(1953)は、複合動詞における後項動詞の中で、原義が希薄になって助動詞化するものは、前項動詞に附属の意味を添えるということである、と述べている。複合動詞後項を「補助動詞的要素と考えられない形」と「補助動詞的要素と考えられる形」に分け、そのうちの「補助動詞的要素と考えられる形」(210語)を「強意的な意味を添えるもの(縮み上がる、叫び上げる、嘆き余る、恐れ入るなど)」、「動作の方向を示すもの(積み込む、逃げ出すなど)」と「動作の起こり方を示すもの(読み切る、飛び損なう、思いそめる、乗り続けるなど)」の三つに分ける。

森田(1978)は、複合動詞を意味の度合いによって五つの段階に分ける。第一段階から第五段階までそれぞれ以下のように述べている。

- ① 並列関係(二つの動詞が結びついて生ずる意味関係として最も単純なものは、両動詞が対等の関係で並列する「—して—する」形式)
- ② 主述、補足の関係(上下の動詞がそれぞれ独立した意味を持ち、それが並列関係でなく、一歩進んで「主語—述語」の「が」格の関係を構成する)
- ③ 具体的意味から抽象的意味へ(主述関係や補足関係を取る複合動詞の中には、複合するどちらか一方の動詞が本義から離れて転義的に用いられている)
- ④ 造語成分への移行(下接部分がそれ自体独立した動詞としては用いられないが、複合語の中で生き残り、しかも実質の意味をまだ残している場合。動詞的造語成分と考えられる)
- ⑤ 実質の意味から形式的意味へ(抽象化がさらに進めば、実質の意味を失い、形式化されてしまう。極度に抽象化されて動詞の意味を失い、単なる強意の添え言葉(接辞)と化してしまう)

三宅(2005)は、現代日本語における文法化現象について説明している。そのうち、複合動詞の文法化については、「つまみ出す」「逃げ出す」「泣き出す」という「～出す」を対象にして様々に分析するとともに、「～かける」について、「同じ「～かける」でも“子供に話しかける”というような場合は語彙的、“本を読みかける”というような場合

は統語的であるが、後者の方が、本来の意味が抽象化されている(アスペクト的な意味を新たに得ている)と言える。このようなことを考慮すると、この統語的複合動詞の後項は、文法化されたものとみることも可能であると思われる。」と述べている。さらに、一つの形式が持つ複数の用法間にも連続性があることも考え合わせると、複合動詞における語彙的・統語的という二分類を、文法化の視点から捉え直してみるものの有効性も否定できない、と指摘している。なお、文法化の規定について、三宅(2005: 62-63)では、以下のように述べている。

実質的な意味を持ち、自立した要素になりうる語のことを「内容語」(content word)と呼び、逆に、実質的な意味、及び自立性が希薄で、専ら文法機能を担う要素になる語のことを「機能語」(function word/grammatical word)と呼ぶことにすると、「文法化」(grammaticalization)とは、概ね「内容語だったものが、機能語としての性格を持つものに変化する現象」と言えるであろう。(中略)文法化には、二つの異なった側面が存在する。一つは、実質的な意味が抽象化、希薄化、あるいは消失する、という意味的な側面である。他の一つは、自立性を失い、もっぱら文法機能を担う要素になる、という形態・統語的な側面である。

一方、複合動詞の文法化を体系的に論述したものに、田辺(1996)が挙げられる。田辺(1996)は、本動詞の辞書的意味が複合動詞形成後の程度生きているかによって、複合動詞を以下の三種類に分けている。

- A. 二つの動詞のそれぞれの辞書的な意味が生かされているもの—意義素融合型 ex. 拾い上げる、飛び出す、叩き壊す
- B. 前項動詞が、接頭辞化しているもの ex. 取り決める、突っ込む、こみ上げる
- C. 後項動詞が接辞化しているもの—文法化型 ex. 読み切る、作り上げる、騒ぎ立てる

この中の「意義素融合型」と「文法化型」の双方の型を有する複合動詞「～こむ」「～きる」「～ぬく」「～あげる/あがる」を対象として、文法化の二つの判断基準①後項動詞の自・他の区別が複合動詞の自・他を拘束するか、②内の関係の連体修飾節内の複合動詞が動詞的述語となるか性状規定となるか)を用いて、意義素融合型(文法化の第一段階)と文法化型(文法化の第二・三段階)に属する各段階の複合動詞の文法的特徴を考察している。判断基準①に関しては、文法化を始めた後項動詞が自動詞しか前項動詞に取らない、または他動詞しか許容しないといった動詞の自他の区別をめぐった接合制限の有無が考えられる。判断基準②に関しては、田辺は、寺村(1984:194)の

「連体修飾のテンス・アスペクトの現れ方を説明する項目の中で、修飾語が動的述語か状態性のものかということを考えなければならない」ということを引用し、これを複合動詞に適用し、「後項動詞の文法化は、複合動詞の動的述語から状態性への移行に反映していることが認められた」と述べ、「文法化の第一・第二段階では、連体修飾節内の複合動詞は、動的述語として考えられるが、第三段階では性状規定的述語の文法的特徴を示すのである」と論じている。

以上、先行研究を概観したが、意味の面から見ると、それらの先行研究は主観的なものの扱いが不十分なところがあると考えられる。例えば、田辺(1996)では、「膨れあがる」と「思いこむ」を第三段階の文法化型に属させるが、この段階における後項動詞「一あがる」と「一こむ」の意味合いがどのように異なるかについては論述していない。「かま猫の体は何倍にも大きく膨れ上がり、金色を帯びていきました。」(宮沢賢治『賢治のトランク』)において、後項動詞「一あがる」は前項動詞「膨れる」の状態を強調する働きを表している。これに対し、「人の出入りと一緒に勝手に出たり入ったりしているので、近所の人是我が家の飼犬だと思い込んで、文句の電話がかかってきた。」(佐藤愛子『犬たちへの詫び状』)の「思いこむ」は「近所の人のは考えは間違っている」という意味になり、後項動詞「一こむ」には話者のマイナス評価の意味が含まれると考えられる。この点について、田辺(1996)では言及されていない。

3. 考察対象と分析方法

複合動詞には、同じ形式の後項でも、異なる前項と結びつくことによって意味が異なることが認められる。本稿は、生産性の高い、七つの複合動詞後項「一だす」「一かける」「一つける」「一こむ」「一あげる/あがる」「一ぬく」を取り上げ、それぞれの意味の違いを段階的に捉えて、本動詞の意味がどのように抽象化しているのかについて考察するものである。意味上から、複合動詞後項段階区分は以下のように設定することにする。

第一段階 本動詞の意味がそのまま生きている。(原義・方向)

第二段階 動詞の意味が抽象化しているが、動詞的性質を失っていない。(アスペクト)

第三段階 本動詞の意味が失われて、副詞的意味になる。(副詞的修飾)

第四段階 動詞の意味が感情的意味になる。(評価・丁寧さ)

また、第一段階から第四段階まで、後項の意味は次第に抽象化するが、それぞれ次

のような意味的・統語的基準によって区別する。

【基準A】 本動詞の意味が生きているかどうか

【基準B】 本動詞の意味が抽象化して、動詞的性質を失っているかどうか

【基準C】 全体の意味を「副詞＋前項」で表せるかどうか

【基準D】 動作主の動作に対しての評価・丁寧さなどの有無

基準Aの「本動詞の意味がそのまま生きているかどうか」というものは、原義或いは動作の方向を判断するものである。例えば、「一あがる」と「一あげる」の場合、「飛びあがる」、「持ちあげる」のように、動作主や対象物が前項動詞の動作によって物理的に上の場所に移動した場合、本動詞「上がる」「上げる」の意味がそのまま生きていると考えられる。「見上げる」のように、動作主の目ではなく、視線だけが「上」へ移動するので、この場合は、動作の方向を表す。

基準Bの「動詞の性質を失っているかどうか」は本稿では第二段階の「アスペクトの意味範疇」に適用する。この場合、後項動詞は前項動詞の動作や行為が時間軸上の段階として捉えられる。例えば、「降り出す」「書き上げる」において、後項「一だす」「一あげる」は元々の動詞の意味が薄れて、それぞれ「降るのが始まる」「書くことを終了させる」という意味であり、動詞の本来的な性質をまだ失っていない。

基準Cの「全体の意味を「副詞＋前項」で表せるかどうか」は、第三段階の「副詞的修飾」になるかどうかを判断するものである。このグループの複合動詞後項は意味的に副詞に似ているものであり、前項の表す動作・行為を強度、程度、時間の長さなどの面で修飾しているものとして捉えられる。例えば、「叱りつける」は「強く叱る」「厳しく叱る」という意味であり、後項の「一つける」は「強く、厳しく」というような意味として捉えられる。「考えこむ」の場合は、「深く考える、深刻に考える」という意味であり、前項は「深く、深刻に」というような意味として捉えられる。

基準Dの「動作主の動作に対して話し手の評価・丁寧さの有無」は第四段階を判断するのに用いる基準である。例えば、「決めつける」は「一方的に断定する」という意味であり、後項の「一つける」は「一方的に」というマイナス評価が含まれていると言える。

4. 考察

以下、各段階の例文を見ながらそれぞれの特徴を考察してみる。

4-1. 第一段階

- (4) 日本海でロシアのタンカー「ナホトカ号」が転覆し、多くの重油が海に流れだしました。(内山裕之監修『生き物とすみかの関係を知らう』)
- (5) お兄さんはこっちを向いて、私ににっこりと笑いかけてくれた。(風見潤『黒幕をやっつけろ』)
- (6) 長さ五尺、広さ一尺八寸、厚さ一寸、頭には馬髪を編みつけ、赤白土墨でもって鉤形を画いていた。(森浩一『日本神話考古学』)
- (7) 間もなく、トラックでベッドが運びこまれる。(大森実『わが闘争わが闘病』)
- (8) 『結び』の手品師は二重にした紐を軽く手のひらで持ち上げています。(ジェフリー・バドワース(著)乙須敏紀(訳)『結びのテクニック』)
- (9) 人差し指に冷たいものが触れた。ケルトンの禿げあがった後頭が迫った。(新堂冬樹『闇の貴族』)
- (10) 光はもう一度走り、今度はコウモリ男を射ぬいた。(和田登『魔界の使者コウモリ男』)

第一段階においては、本動詞の意味がそのまま複合動詞後項の中に生きている。例(4)「―だす」の場合、自動詞の前項動詞と結びついて、複合動詞全体が前項動詞と同じく、自動詞になる。「流れだす」の後項は前項動詞の表す動作「流れる」の「内から外へ」という方向を表し、本動詞「だす」の元々の動作性が少し薄れて、方向だけが残っている。例(5)の「―かける」は「相手に向かって」という方向を表す。例(6)の「―付ける」は元の動詞の「付着させる」という意味をそのまま残している。例(7)～(9)はそれぞれ本動詞の物理的移動の意味が生きている。例(10)の「―ぬく」は、物がある空間の中からある方向に向かって「貫く」という意味を表す。

この段階では、後項には、「動作そのもの」と「動作の方向」の両方の意味が含まれている場合があり、区別するのが難しい場合があるので、ここで区別せず全て第一段階として扱っている。

4-2. 第二段階

- (11) 娘子軍の兵士たちも一斉に、声を上げて泣きだした。(安能務『隋唐演義』)
- (12) 僕は何かを言おうとして口を開きかけたが、言葉は出てこなかった。(村上春樹『国境の南、太陽の西』)
- (13) 乗り付けてきたクルマを発進させると、男はすぐに携帯電話を取り出しまし

た。(横田濱夫『騙しのカマクリ』)

(14) 白いビーズで細長く編み上げたベルギーのシャンデリア。(岡崎英生『BISES』)

(15) 魚は焼きあがってから直ぐに網から取り出した方が取りやすいのか。

(Yahoo! 知恵袋)

(16) たとえ世界を敵にしてもキミだけは守りぬきたいんだ。(Yahoo! 知恵袋)

この段階では、「一だす」の場合は自動詞とも他動詞とも結合して、動作の開始段階というアスペクトの意味を表す。「一かける」の場合は、前項の動作が始まる直前或いは途中まで行うというアスペクトの意味を表す。この段階において、前項動詞には「挫折しかける」「反論しかける」「枯渇しかける」「沈没しかける」のようなスル動詞の形、及び「行き過ぎかける」「思い出しかける」「作り立てかける」のような「V+V」の複合動詞も観察される。「一つける」はいつもある動作・行為を行うというアスペクトの意味(習慣)を表す。「一あげる」「一あがる」は動作の完了を表し、「一ぬく」は動作を「最後まで」やるというようにそれぞれ時間軸における位置づけを表す。例えば、「一ぬく」の場合、「結局空港へ着くまで六台の車を追いぬく。」(はた万次郎『北海道田舎移住日記』)を「それぞれのテーマでおおむね五年は考えぬく…」(日垣隆『エースを出せ!』)と比べて、前者は動作「追う」の移動を表すが、後者は動作「考える」の継続時間を表す。逆に、「走者は10分にわたってアメリカ人を追いぬいた」とは言えない。以上で述べたように、動作の開始・開始の直前・途中・終了・習慣などのような時間概念はどの動作においても存在しているので、第一段階に比べて、より広範囲の動詞(活動動詞、移動動詞、変化動詞)が前項動詞になりうる。

4-3. 第三段階

(17) 家の中に入ると、お金や宝石のかくし場所をたちまち見つけた。(那須正幹『どろぼうトラ吉とどろぼう犬クロ』)

(18) 男たちに殴りつけられる度に、剛太の悲鳴がどんどん大きくなっていた。(辻仁成『ニュートンの林檎』)

(19) 養母が焼死したと告げられた途端、その場に座り込んでしまったのですが…(佐野洋『巡査失踪』)

(20) 後手に縛り上げられた手首が感覚を失くしている。(野田昌広『銀河乞食軍団』)

(21) 木村は膨れあがった唇を痛そうに動かして、それでも直の顔を見ると、まず強がりを言った。(三朱門『ささやかな不仕合わせ』)

- (22) ユダヤ人たちはどうしてよいか分からず、困りぬいたあげく、カバラ学者たちのところへ行行って、なんとか拘ってくれるように頼み込んだ。(澁澤龍彦『黒魔術の手帖』)

第三段階では、後項動詞は動詞の実質的意味を失って、「動作の強さ、動作の量、時間の長さ」などの範疇を表し、この範疇の意味を表す副詞と同じような働きを持っていると考えられる。従って、前項動詞の範囲も広く、自動詞とも他動詞とも結びつく。例えば、「殴りつける」の「つける」は前項の動作動詞「殴る」の動作の強さを修飾し、「強く殴る」といった意味になるので、「動作過程」を修飾する例となり、「老けこむ」の「こむ」は前項の変化動詞「老ける」の結果状態の程度を修飾し、「すっかり老けてしまう」のような意味になるので、「状態結果」を修飾する例となる。「見つけた」の「一だす」は動作「見つける」の結果を強調する働きを持っていて、単に「見つける」に比べて、「見つけた」結果対象物を明るみに出すというような意味を示していると考えられる。「聞きだす」の場合も同じように、単なる「聞く」だけではなく、相手の「考え方」を聞いて、自分の情報として入手するという意味である。「膨れあがる」は「大きく膨れる。数量などが、基準や予想を大きく上回る」という意味を表し、後項は「大きくなる」、或いは、唇が膨れて、結果状態として「大きくなった」という副詞的なものに相当して、前項の表す動作を強調し、或いは副詞的に修飾しているものとして捉えられる。「涸れあがる」は「すっかり涸れる」という意味で、後項「一あがる」は前項「涸れる」の状態を修飾しているものとして捉えられる。

4-4. 第四段階

- (23) ある研究者は、人格異常者は「人間の素質的な変種」と決めつけ、治療を施してもその異常性は生涯変わらない、といってさじを投げています。(ゲーリー・ズーカフ(著)松浦俊輔(訳)『カルマは踊る』)
- (24) それは、私たちの信じこんできた価値観を揺さぶり、思わず目をそむけ否定したくなることであるかもしれない。(中島由佳利『新月の夜が明けるとき』)
- (25) 大切な人への想いを切々と歌いあげる彼女の情感豊かな歌声が印象深い。(『Weekly ぴあ』)

第四段階の「感情的意味」は「評価」「丁寧さ」などのようなものが含まれている。「評価」は、動作主の動作や行為に対する話し手の評価を表す。「丁寧さ」は、話し手と聞き手の間に、上下関係、尊敬、謙譲などの要素が入ってくる現象であり、社会的階層関係

の現れであると言える。例えば、「そこで、規格外米を自主流通米でやってもらって、それで余った分は政府が買いあげることを検討しておる。」「(『国会会議録』)」の「買いあげる」のような動詞は、政府と国民、或いは客と店員の間に使われるが、ここでは国民から見ると、政府は上、店員から見ると客は上、というような地位的差異が反映されている。

5. 考察の結果

ある動作・行為が行われる場合、その動作は主に動作主、対象者、対象物、話し手、などの要素に関わっていると思われる。そのうち、動作主は動作・行為の実行者であるので、動作に一番近い関係として扱われる。動作の方向は実際の動作の意味から少し離れて、その方向だけ残っていると言える(第一段階)。動作は時間の流れに従って行われるものであり、その時間軸における位置づけは第一段階より離れているが、その動作の意味がまだ失っていない(第二段階)。動作の強度、時間の長さ、動作の量などの要素は動作を行う時の付加的要素であり、動詞の実質の意味を失っており、動作・行為の強さ、時間の長さ、強度などを修飾する役割を果たしているものとして捉えられる(第三段階)。話し手の評価、尊敬などの要素は動作そのものから一番離れた言語主体に関わるものとして捉えられる(第四段階)。

複合動詞後項「ぬく」を取り上げて説明してみる。原義の「引きぬく」は「引っ張って外に取り出す」という移動意味を表す。「守りぬく」の場合は、元の移動の意味が薄れて、「最後まで」という時間的意味を表す。「困りぬく」の場合は、後項の意味はさらに抽象化し、「困る」状態の程度的強さを表すようになった。「このように、後項「ぬく」の意味が段階的に抽象化している。

上述の四段階において、各段階の区別は難しい場合も考えられる。これは、動詞の意味は動詞自身の多義性及び文脈の要素からの影響を受ける場合があるからだと思われる。

以上の考察に基づいて、複合動詞後項「一だす」「一かける」「一つける」「一こむ」「一あげる」「一あがる」「一ぬく」の意味抽象化の段階を分類した。その結果は以下の表1のようにまとめられる。ただし、同じ形式の複合動詞でも文脈によってその意味が変わる場合もあるため、各複合動詞の個別的な多義性についてはここでは考慮せず、代表的な意味に基づいて分類した(文脈によって意味が変わってもその意味が以下に示した表の中のいずれかの段階に所属すると考える)。

表1 複合動詞後項の意味的抽象化の段階とその語例

後項 \ 段階	1	2	3	4
	原義・方向	アスペクト	副詞的修飾	感情的意味
—だす	流れだす	泣きだす	見つけだす	/
—かける	笑いかける	読みかける	/	/
—つける	編みつける	乗りつける	聞きつける	決めつける
—こむ	運びこむ	/	座りこむ	信じこむ
—あげる	持ちあげる	編みあげる	縛りあげる	買いあげる
—あがる	飛びあがる	焼きあがる	膨れあがる	/
—ぬく	引きぬく	守りぬく	困りぬく	/

以上の分析結果から、本稿では複合動詞後項の意味的抽象化における方向性を以下のように提案する。ただし、ここに述べた方向性はあくまで傾向であり、絶対的なものではない。

方向→アスペクト→副詞的修飾→感情的意味

第一段階の「方向」から第四段階の「感情的意味」まで、後項の意味が原義から離れて、元々の意味を次第に失っていくと考えられる。それぞれの複合動詞において、具体的な抽象化のルートは「方向→アスペクト」、「方向→感情的意味」、「方向→副詞的修飾」、「副詞的修飾→感情的意味」というように、様々なタイプが見られると考えられる。また、田辺(1996:2)にも、「空間領域の移動を示す動詞が文法形式に転換しやすいことは、他言語にも認められる事実である。」という指摘があるが、これらの動詞は主に移動を表すものであり、複合動詞の後項として文法化しているものとして考えられる。本稿の考察では、移動動詞のみならず、「—つける」「—かける」などのような動作動詞の場合もそういった意味的抽象化の傾向が見られることが予想される。

6. おわりに

以上、本稿では、複合動詞後項における意味的抽象化の方向性を探ってきた。本稿に提示した複合動詞文法化の一般的傾向に基づけば、従来の語彙的複合動詞と統語的複合動詞(の一部)及び語彙的複合動詞の下位区分(影山(2013)の言う「主題関係複合動詞」と「アスペクト複合動詞」)の連続性を統一的に説明できる可能性があるのではないかと考える。ただし、ここで述べた「統語的複合動詞」は「～出す」「～切る」「～直す」などのような複合動詞を指し、「～始める」「～終わる」「～続ける」などのような

複合動詞を除外する¹。

本稿の考察結果は以下のようにまとめられる。

- ①複合動詞後項の意味的抽象化は「方向」「アスペクト」「副詞的修飾」「感情的意味」の四段階に分けられる。
- ②日本語複合動詞の後項における意味的抽象化の方向性は「方向→アスペクト→副詞的修飾→感情的意味」である。

本稿は複合動詞後項における意味的抽象化の方向性を考察した。この方向性は従来指摘されてきた日本語の述部のカテゴリーの配列順と対応しているが、同じ形式の複合動詞の多義性についてはどのように捉えたらよいか、更なる検討が必要である。また、この七つの複合動詞後項は抽象化段階において、四つの段階がすべて備わるものもあり、二つや三つの段階しかなく、他の段階が欠如しているものも観察される。それぞれの抽象化の特徴が異なるからであると思われるが、より詳しく考察しなければならない。これも含めて今後の課題とする。

注

1. 寺村(1984:174)では、「Vハジメル」は、ほぼ、「Vすることを始める」という意味であるが、その〈Vする〉は自動詞でも他動詞でも、また意志動詞でも非意志動詞でもよい。Vの文法的性質が、Vハジメル全体の文法的性質を決定する。」という指摘があるように、複合動詞「～始める」において「開始」という意味はその本動詞「始める」の中にすでに含まれていると考えられる。一方、複合動詞「～出す」において、「開始」の意味はその本動詞「出す」には含まれていないものであり、元の意味から拡張されているものとして認められる。従って、同じ統語的複合動詞といっても、「～始める」と「～出す」は異なるタイプとして捉えるのが妥当であると思われる。同様に、「～終わる」「～続ける」と「～切る」「～直す」も性質の異なるものとして扱うのがよいと考えられる。

参考文献

- 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房
- 影山太郎(2013)『語彙的複合動詞の新体系—その理論的・応用的意味合い—』影山太郎編『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて—』pp. 3-46、ひつじ書房
- 斎藤倫明(1992)『現代日本語の語構成論的研究—語における形と意味—』pp. 180-196
- 阪倉篤義(1966)『接尾辞の位置』『国語国文』53(5), pp. 197-209. 京都帝国大学国文学会編
- 武部良明(1953)『複合動詞における補助動詞の要素について』『言語民俗論叢・金田一博士古稀記念』金田一博士古稀記念論文集刊行会(編)、461-476、三省堂出版
- 田辺和子(1996)『日本語の複合動詞の後項動詞にみる文法化』『日本女子大学紀要・文学部』45, pp. 1-16、日本女子大学文学部
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』pp. 114-183、194、くろしお出版
- 陳 訥(2013)『語彙的複合動詞と統語的複合動詞の連続性について—「～出す」を対象として—』影山太郎編『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて—』ひつじ書房
- 姫野昌子(1999)『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房
- 西山国雄・小川芳樹(2013)『複合動詞における助動詞化と無他動性』遠藤喜雄編『世界に向けた日本語研究』関

拓社

- 松本 曜(1998)「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』114, pp. 37 - 83、三省堂
- 三宅知宏(2005)「現代日本語における文法化—内容語と機能語の連続性をめぐって—」『日本語の研究』1 - 3, pp. 61 - 76、武蔵野書院
- 森田良行(1978)「日本語の複合動詞について」『講座日本語教育』14, pp. 69 - 86
- 由本陽子(2013)「語彙的複合動詞の生産性と2つの動詞の意味関係」影山太郎編『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて—』pp. 109 - 142、ひつじ書房
- 王 秀英(2014a)「上昇を表す複合動詞の日中対照研究—「～上げる」と「～上」を対象として—」『文化』77(3・4), pp. 53 - 73、東北大学出版会
- (2014b)「複合動詞の後項が前項を意味的に修飾する場合について—「～こむ」を対象として—」『国語学研究』53, pp. 16 - 29、東北大学大学院文学研究
- (2015)「複合動詞「～つける」の後項の意味について—本動詞との関連から—」『国語学研究』54, pp. 182 - 195、東北大学大学院文学研究

付記 本稿の元となる学会発表(第16回日本語文法学会、2015年11月14 - 15日、於学習院女子大学)の際に貴重な質問とコメントをくださった方々にお礼を申し上げます。

—東北大学大学院生—